

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和6年度 第2号 2024年11月25日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和6年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2024年11月12～16日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ 渡島～胆振海域におけるスケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を大きく下回った（前年比40%）。
- ・ 魚群反応の強い海域は日高沖に偏ってみられた。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mにみられ、特に海底についた反応は日高沖で水深400m前後、渡島～胆振沖で500m前後と非常に深かった。
- ・ 水温は、水深150～300mにかけて、胆振沖で平年より1～2℃、渡島沖で同1～4℃高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広く観察されましたが、その中でも日高沖の162漁区に強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島沖から胆振沖にかけての平均反応量は、前年同期を下回り過去最低水準であった2019年度と同程度でした（図3）。ただし、日高沖（O線、R～S線）には強い魚群反応があったことから、今後、この日高沖の魚群が産卵場となる渡島～胆振沖に移動してくるものと考えられます（図1）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mに観察されましたが（図4）、漁獲対象になりやすい海底に張り付いた魚群反応は、渡島～胆振沖では水深500m前後、日高沖ではそれよりも浅い水深400m前後となっていました（図2）。
4. 日高沖（O線付近の水深360mおよび420m）および胆振沖（I線付近の水深390mと、G線付近の水深360m）でトロールによる漁獲調査を実施しました（図5）。その結果、魚群反応が強かった日高沖では、スケトウダラ成魚（尾叉長35～50cm）が主体となっていました。魚群反応があまり強くなかった胆振沖では、スケトウダラ未成魚（尾叉長20cm前後）が主体でした。ただし、日高沖の水深420mではソコダラの仲間（主にテナガダラ）もスケトウダラ成魚と同程度混獲されたことから、水深400m以深の反応にはスケトウダラ以外の魚群も混在していると考えられます。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（D線沖）、胆振沖（H線沖）ともに、水深150～300mにかけては平年（2002～2023年度のこの調査における平均値）よりも高く、胆振沖で1～2℃、渡島沖で1～4℃平年を上回っていました（図6）。

なお、今回の調査は年明け後の1月中旬（2025年1月15～23日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

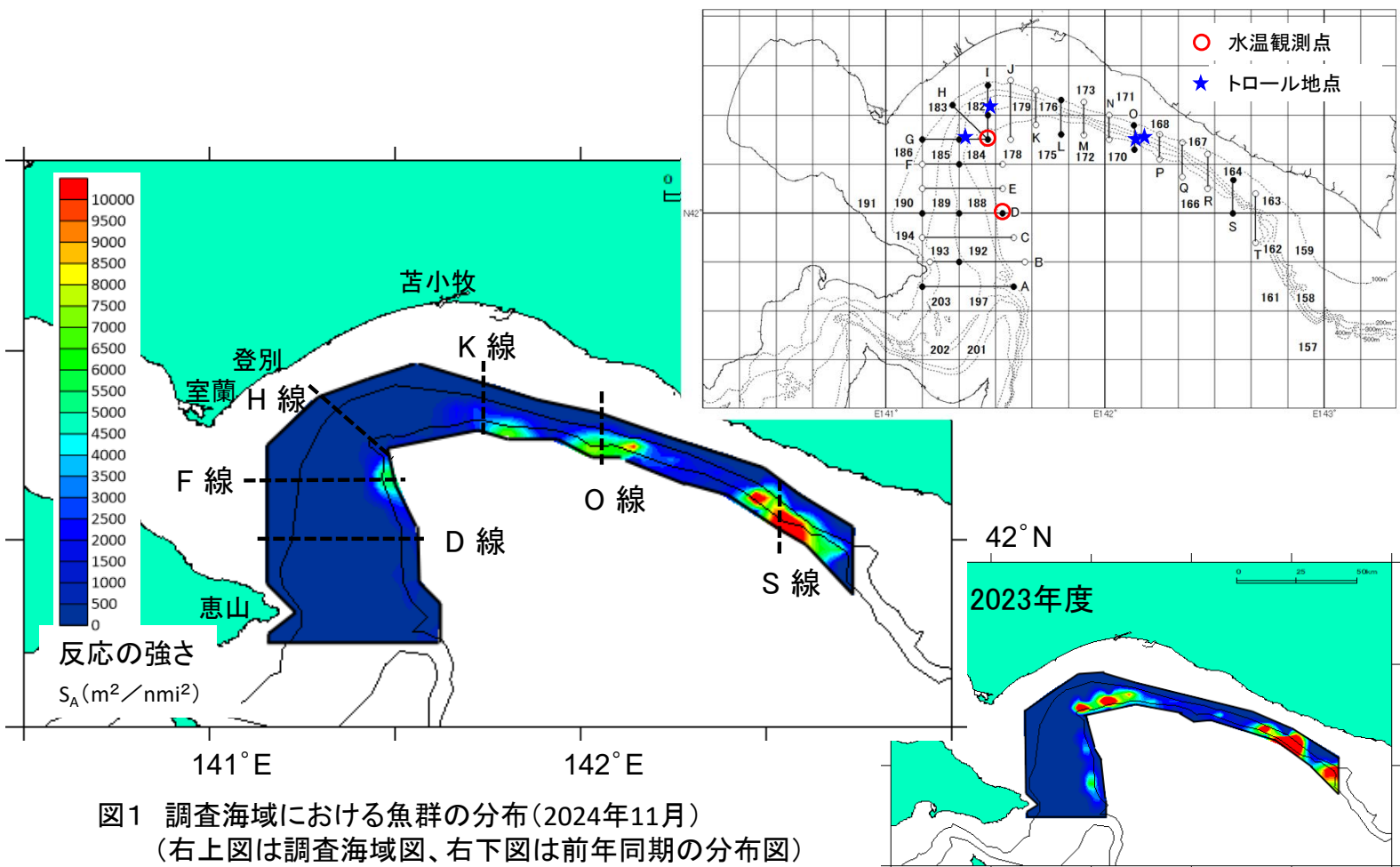


図1 調査海域における魚群の分布(2024年11月)
(右上図は調査海域図、右下図は前年同期の分布図)

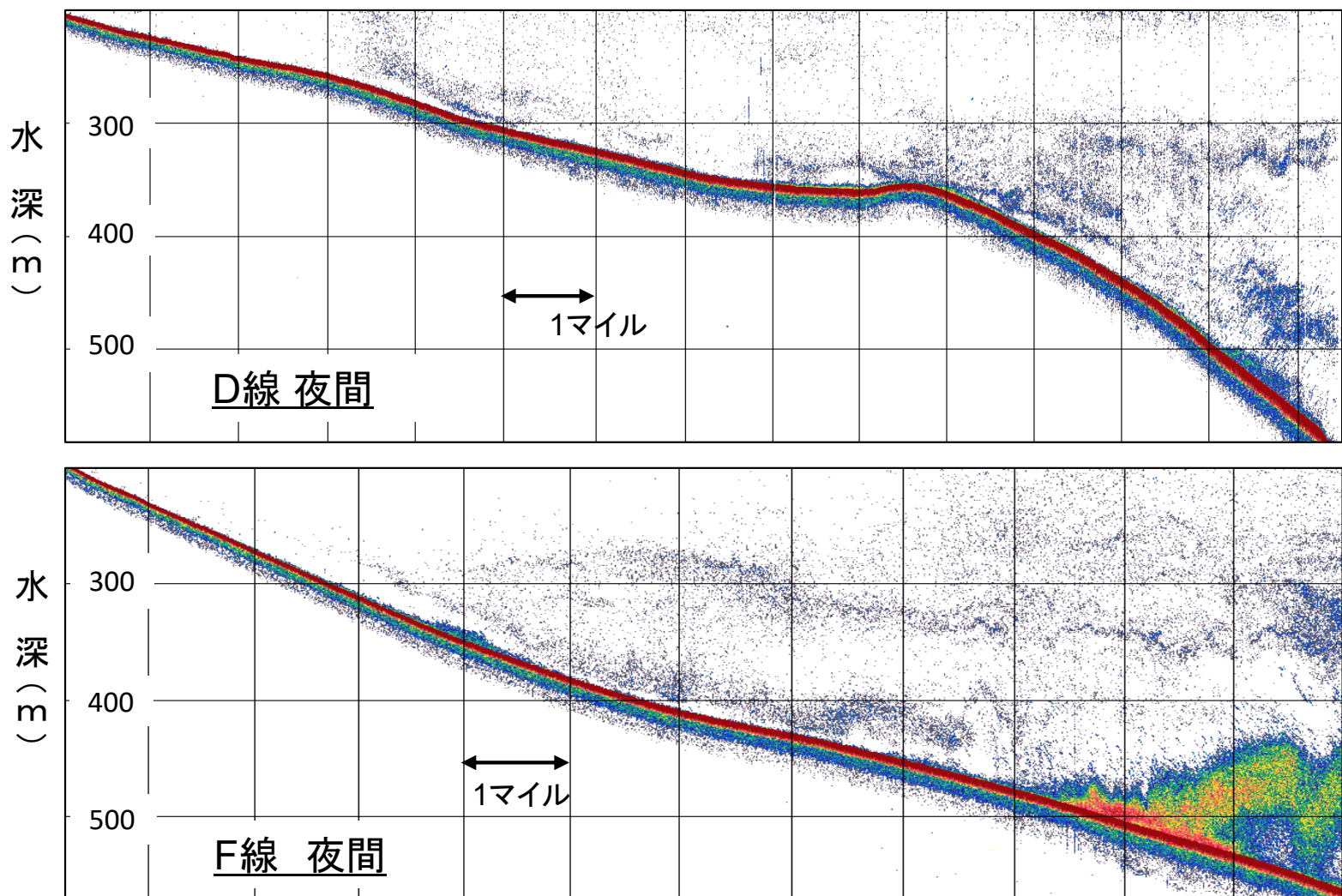


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

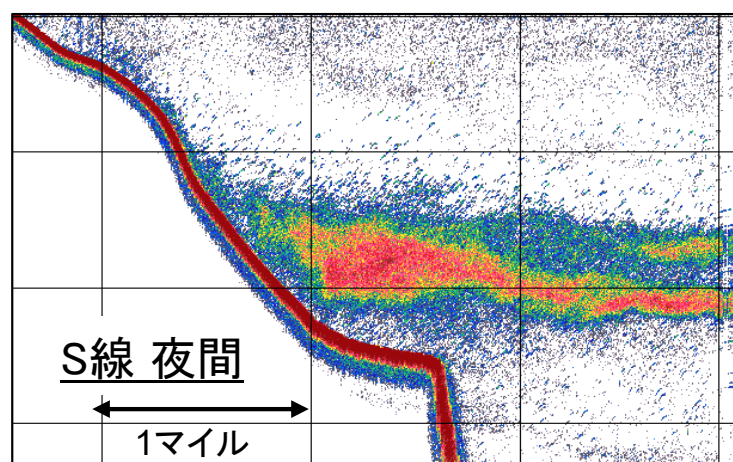
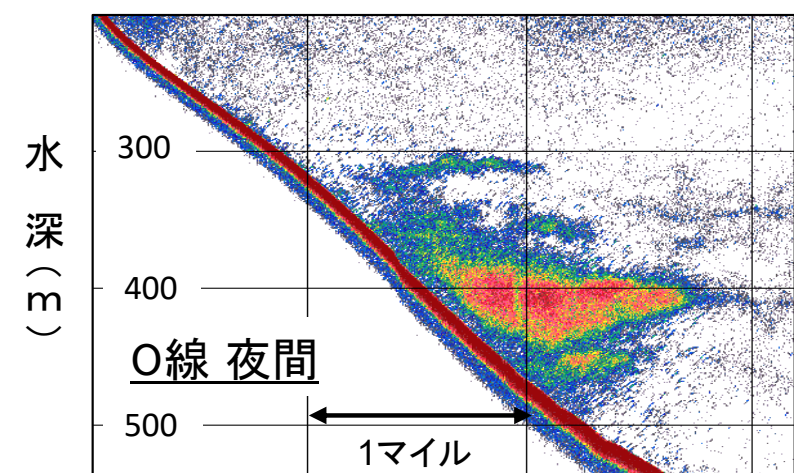
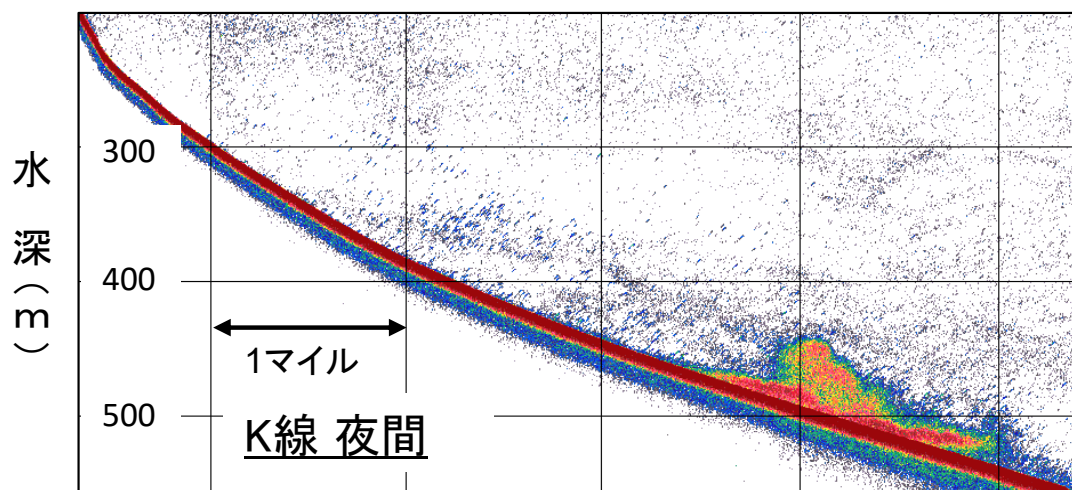
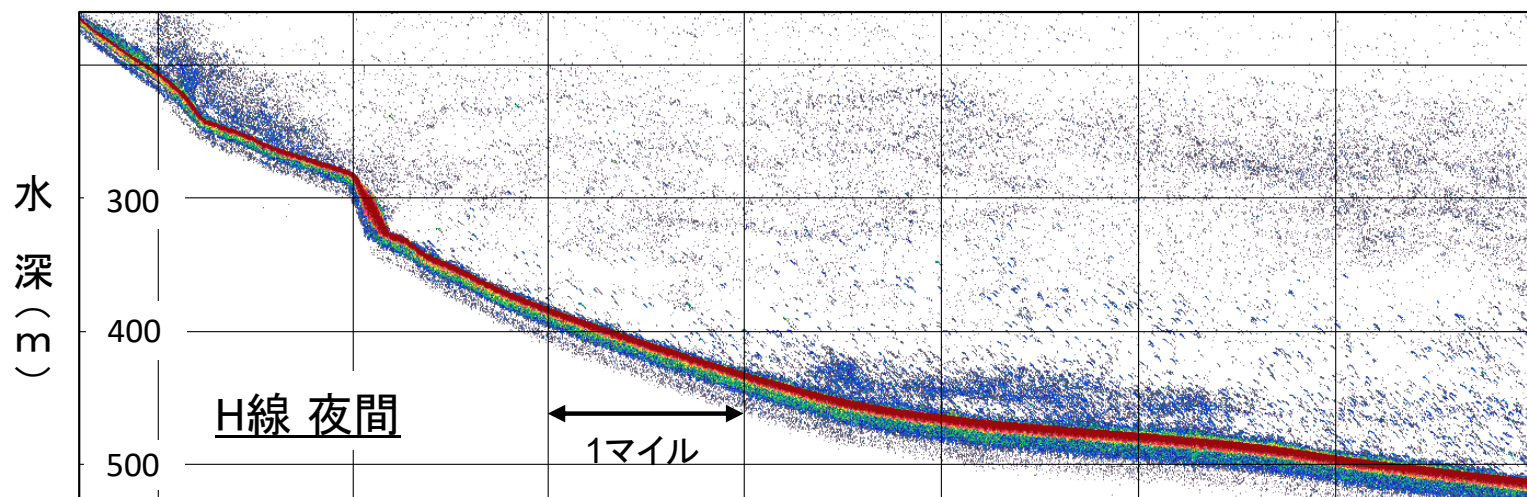


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

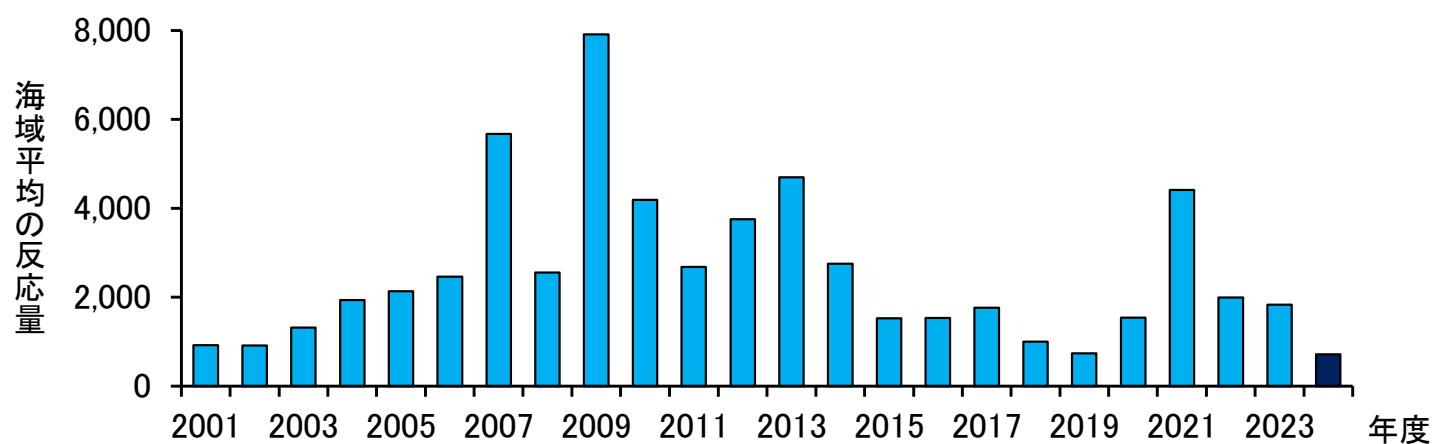


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移(1平方マイルあたりの反応量)

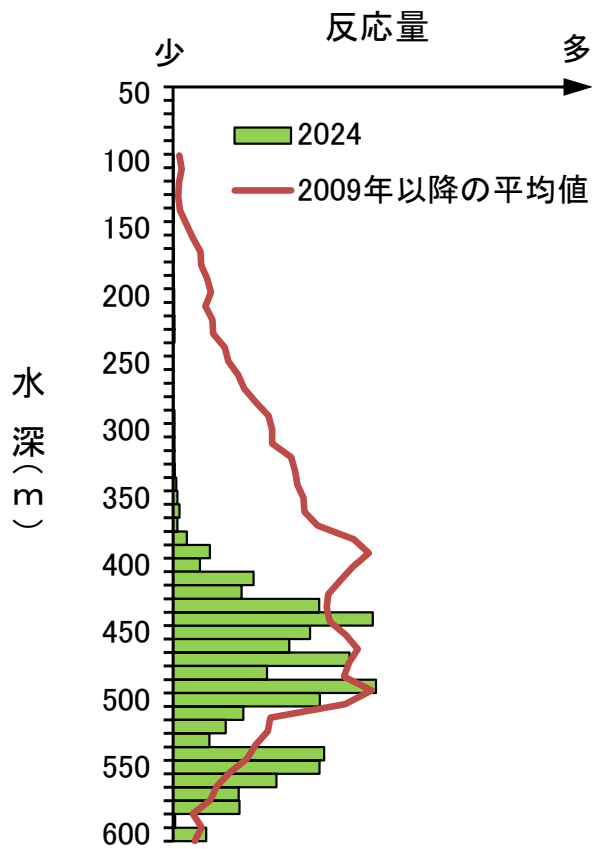


図4 水深別の平均魚探反応量(海域全体)

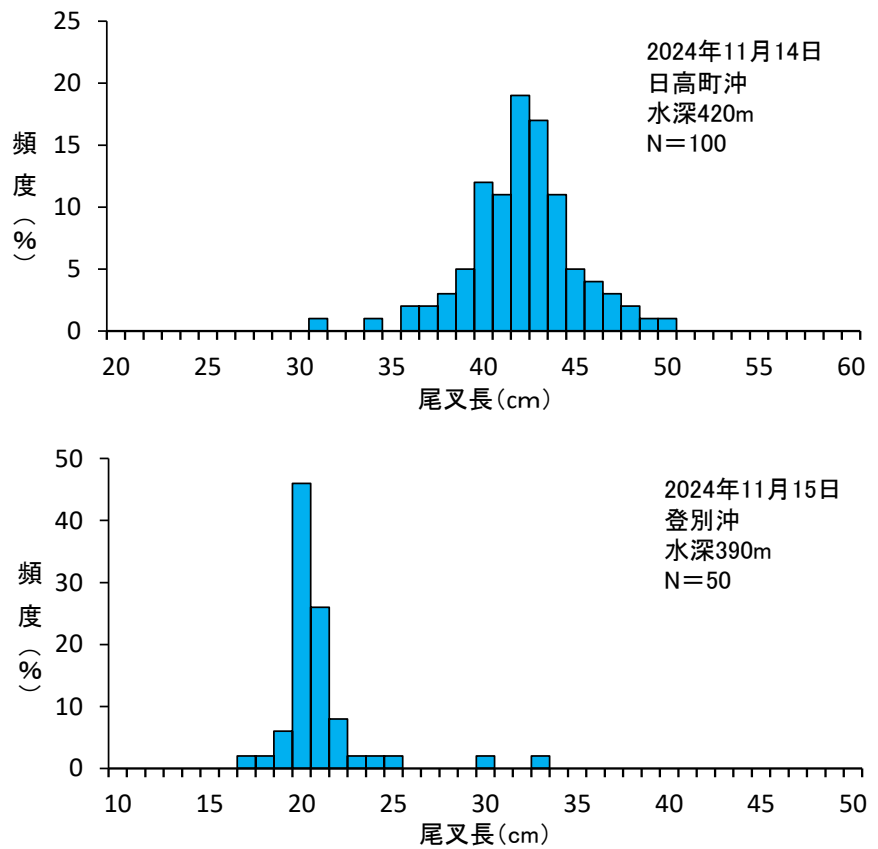


図5 スケトウダラ漁獲物の体長組成
(上:日高町沖, 下:登別沖)

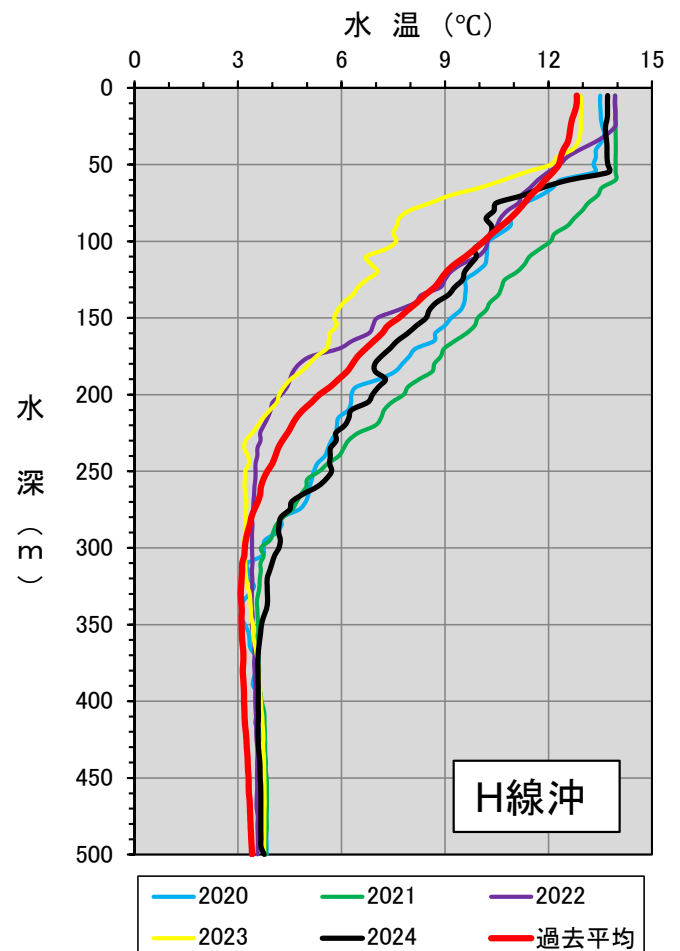
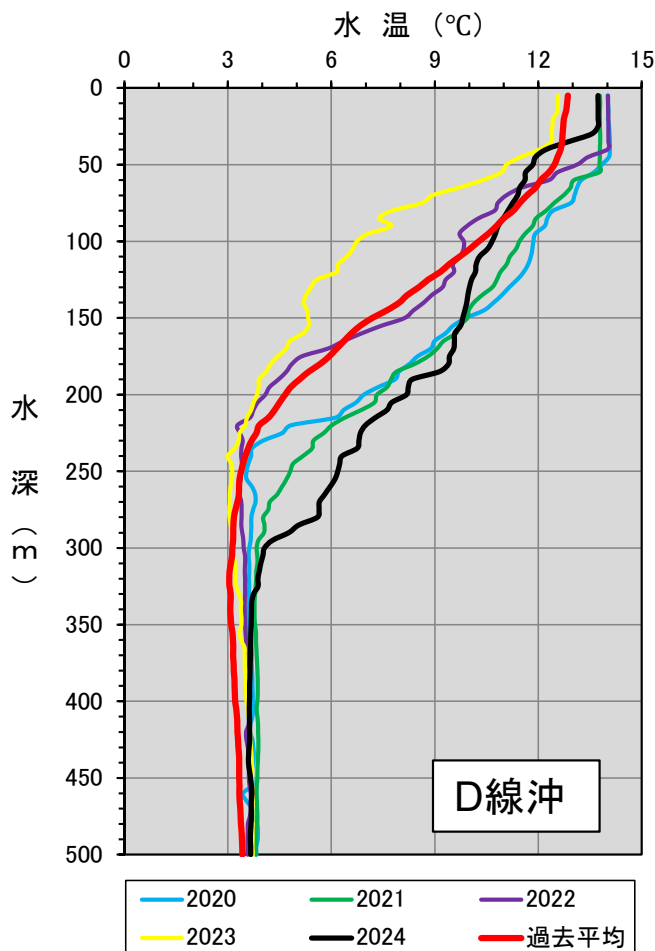


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:Dライン沖(N42° ライン), 右:Hライン沖(登別沖)
(過去平均:本調査における2002~2023年度のそれぞれの調査点の平均値)

※この調査の一部は、水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。